

# がん検診で早期発見に努めましょう

▼平田院長プロフィール  
大分上野丘高校から川崎医科大学へ進学。昭和六十二年に同大を卒業後、大分医科大学（現大分大医学部）第二外科へ入局。国立長崎中央病院、大分中村病院、厚



ひらた医院  
院長 平田孝浩

生連鶴見病院、宇佐胃腸病定医。日本外科学会、大分大腸肛門病学会、日本消化器外科学会、日本消化器内視鏡学会、日本消化器内視鏡学会、日本消化器病学会、日本胃癌学会に所属。連絡は、ひらた医院 電話548・7616へ。  
学博士。日本外科学会専門医。日本消化器外科学会認定医。電話548・7616へ。

HP <http://www.hirataiin.com/>  
E-mail: [info@hirataiin.com](mailto:info@hirataiin.com)

になりました。また大腸がんの一年以内の受診率は他

大腸がんは、がんができ

内閣府が行った「がん対策に関する調査」の結果で、がん検診を「重要と思う」と答えた人が九四・七％に上る一方、過去二年以内に実際に検診を受けたとする人は、対象部位のいずれも三〇％台にとどまっていることが分かります。がん検診の必要性を認識していません。長さを成人で一・五センチあり、主に水分の吸収と便を形づくる働きをして

大腸は、小腸に近いところから、「盲腸」「上行結腸」「横行結腸」「下行結腸」「直腸」に分けられます。長さを成人で一・五センチあり、主に水分の吸収と便を形づくる働きをしています。

大腸がんとは、がんが発生した場所によって、「結腸がん」と「直腸がん」に分けられる。大腸は、小腸に近いところから、「盲腸」「上行結腸」「横行結腸」「下行結腸」「直腸」に分けられます。長さを成人で一・五センチあり、主に水分の吸収と便を形づくる働きをしています。

大腸がんは、四十五歳代から増え始め、六十歳代で最も多くなり、七十歳代でも四十歳を過ぎたら一年に一回は便潜血

大腸がんは、四十五歳代から増え始め、六十歳代で最も多くなり、七十歳代でも四十歳を過ぎたら一年に一回は便潜血

大腸がんは、四十五歳代から増え始め、六十歳代で最も多くなり、七十歳代でも四十歳を過ぎたら一年に一回は便潜血

大腸がんは、四十五歳代から増え始め、六十歳代で最も多くなり、七十歳代でも四十歳を過ぎたら一年に一回は便潜血

部位に比べ二七・一％と低く、また、今まで一度も検診を受けていない人の割合は五四・一％と一番高かったそうです。

その一方で、主ながんの部位別死亡率は約五十年の間に男性で七倍、女性で六倍に増えています。また女性はおもな部位別死亡率で大腸がんが一位になっています。

大腸がんは、四十五歳代から増え始め、六十歳代で最も多くなり、七十歳代でも四十歳を過ぎたら一年に一回は便潜血

大腸がんは、四十五歳代から増え始め、六十歳代で最も多くなり、七十歳代でも四十歳を過ぎたら一年に一回は便潜血

大腸がんは、四十五歳代から増え始め、六十歳代で最も多くなり、七十歳代でも四十歳を過ぎたら一年に一回は便潜血

大腸がんは、四十五歳代から増え始め、六十歳代で最も多くなり、七十歳代でも四十歳を過ぎたら一年に一回は便潜血

大腸がんは、四十五歳代から増え始め、六十歳代で最も多くなり、七十歳代でも四十歳を過ぎたら一年に一回は便潜血

を受けるように検査を受け、異常があれば内視鏡検査を受けるように検査や同時に「NBI」という特殊な光でがんを見つけよう。

大腸内視鏡検査や同時に「NBI」という特殊な光でがんを見つけよう。

大腸内視鏡検査や同時に「NBI」という特殊な光でがんを見つけよう。